

令和7年度 美術教育講座

卒業論文  
修士学位論文  
博士学位論文  
合同研究発表会

日時

令和8年2月16日(月) 13:00-14:40

会場

岡山大学教育学部東棟3階共用演習室(1306)

・卒業論文発表(発表10分, 質疑応答5分)

13:00-13:15

表現における児童の承認意識と学習の姿との関係の研究

岡山大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース美術教育専修 02B22066 吉岡千晴

13:15-13:30

学校教育での学習活動を通じた地域参画意識の変化に関する研究

岡山大学教育学部学校教育教員養成課程中学校教育コース地域教育専修 02B22271 富谷志帆

・修士学位論文発表(発表15分, 質疑応答5分)

13:30-13:50

描画材料の自己決定の状況が表現活動に与える影響についての研究

岡山大学大学院教育学研究科教育科学専攻 22M24019 溝上怜海

・博士学位論文発表(発表30分, 質疑応答5分)

13:55-14:30

造形行為を伴う遊びを視座とした遊びと学習との質的な相関についての研究

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教育科学実践学専攻芸術系教育連合講座

D23601K 山中慶子

14:30- 総評 清田哲男先生

令和7年度 岡山大学美術教育講座論文発表会

令和8年2月16日

岡山大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース美術教育専修

02B22066 吉岡千晴

指導教員 清田哲男先生

## 表現における児童の承認意識と学習の姿との関係の研究

### 章立て

#### 序章 研究の背景と概要

- 第1節 研究目的
- 第2節 研究の動機
- 第3節 研究の構成

#### 第1章 問題の所在

- 第1節 承認関する先行研究と問題意識
- 第2節 本研究の仮説

#### 第2章 調査の手順

- 第1節 本研究の仮説からの課題
- 第2節 調査の概要
- 第3節 調査対象
- 第4節 調査①の環境設定
- 第5節 調査①の承認想定ワークショップにおけるワークシートの概要
- 第6節 動画設置の理由、アンケート項目設定の理由
- 第7節 事後アンケートの概要
- 第8節 調査②の授業の概要と目的
- 第9節 調査②の対象者
- 第10節 調査②の環境設定
- 第11節 用意した材料
- 第12節 調査②の承認想定授業におけるワークシートの概要
- 第13節 振り返りシートの概要
- 第14節 本研究を行うにあたっての教員を対象としたアンケート

#### 第3章 調査①の調査結果と分析

- 第1節 調査①の結果
- 第2節 事後アンケートの結果から見える動機づけへのつながりの可能性
- 第3節 製作中の姿の抽出

第4節 製作中の姿のそれぞれの事例についての分析

#### 第4章 調査②の結果と分析

第1節 調査②の結果

第2節 承認意識と学習の姿の分析方法の検討

第3節 4-2-1～4-2-2 より導かれる可能性

第4節 5つの可能性についての事例と再解釈

第5節 可能性①について

第6節 可能性②について

第7節 可能性③について

第8節 可能性④について

第9節 可能性⑤について

#### 第5章 考察

第1節 考察1

第2節 考察2

#### 第6章 結論及び今後の課題と展望

### 研究の要旨

本研究は、図画工作科における表現活動において、児童が認められたいと思い作品製作を行うことで、日常的な作品製作の動機の生成につながるかどうかについて、児童の学習の姿から明らかにすることを目的とする。図画工作科は児童の日常生活と結びつき、日常生活の中で活用できるようになることが大切だと考える。デューイも、学びは生活と切り離されず、経験が次の経験を生む連続性の中に位置づくべきだと述べている。しかし、実施したアンケートでは、授業外で作品製作をおこなう児童が少ないことが分かっており、学びが日常へとつながっていない可能性が示唆された。また、同時に、誰かから認めてもらおうと作品製作に取り組む児童は半数をきっており、その児童の中でも承認の対象は先生や友達が7割であった。これは、児童の認めてほしい相手が学校内にとどまっている可能性を示唆している。もちろん、製作のなかで大切な動機は「承認」だけではないが、承認されたい相手を学校以外の存在にも広げられることが、学校を卒業しても継続的な日常での製作につながる一つの方法になるのではないかと考えた。そこで本研究では、児童が認められたいと願う製作に取り組むことを目指し、児童の製作への関わり方や姿勢をどのように変化させるのかを検討した。調査としては2つ実施した。調査①では、「笑顔にした相手」を決定して作品製作をおこなうアートワークショップにおける児童の発話・行為を質的に分析し、動機づけにつながる可能性について探った。調査②では、学校の図画工作の授業として実施をし、普段の授業との変化の視点から、承認意識と日常生活での表現活動との関連について検討した。その結果、相手からの価値づけを意識することは、材料や主題を選択する過程で他者の内面が表現活動の目的となり、表現主題が明確になりやす

くなることが明らかになった。また、学校教育活動で、認められたい相手を学校の外の環境にも広げられることが、日常生活での表現活動につながる可能性が明らかとなった。

## 論文の構成

本論文は、序章から第6章までの構成で論を展開した。

第1章では、問題の所在を明らかにした。アンケート調査の結果から、承認意識と日常生活での表現活動に関して問題提起をした。そのうえで先行研究の知見から、認めてもらいたいと願うことと日常生活での表現活動の動機づけとの関連の可能性について挙げ、本研究の位置づけについて示し、仮説を設定した。

第2章では、調査の手順について述べた。調査①②として実施した「笑顔になってほしい相手」を設定するアートワークショップと授業の概要、対象、環境設定、ワークシートの内容、動画撮影およびアンケート項目の設定理由について詳述した。

第3章では、調査①の結果と分析を行った。ワークショップでの児童の製作中の発話や行為をトランスクリプトにし、認められたい思いの表れであると考えられる姿について抽出した。そこで抽出された6つの姿について、それぞれの事例をワークシートやアンケート結果と照らし合わせながら質的に分析することで、承認意識が製作における選択や表現主題の形成、動機づけにどのように関わっていたのかを明らかにした。

第4章では、調査②の結果と分析を行った。調査②では、①普段の図画工作の授業実践、②笑顔になってほしい相手を設定した作品製作の授業実践、③普段の図画工作の授業実践の3回の授業を調査した。それぞれの授業後の振り返りシートから、承認意識の対象の変化でグループ分けをし、それぞれの記述から可能性を導き出した。そこから、それぞれの可能性について、具体的な児童の事例をもとに再検討を行った。可能性①では、認められたい相手の広がり、日常生活での表現活動への動機との関連があること、可能性②では、題材などによって「何を伝えたいのか」を自分で立ち上げられることの重要性、可能性③では、想定されやすい対象について、可能性④では、学校内の対象への承認意識が学校内での活動の意欲に完結されやすいこと、可能性⑤では、価値づけされることを意識することによって生まれる表現活動の変化について検討した。

第5章では、これまでの分析を踏まえた総合的な考察を行った。相手からの価値づけを意識することは、材料や主題を選択する過程で他者の内面が表現活動の目的として機能し表現主題が明確になりやすくなること、また、学校教育活動で、認められたい相手を学校の外の環境にも広げられることが、日常生活での表現活動につながる可能性が明らかとなった。

第6章では本研究における課題と展望について示した。長期的な視点に加え、先生や保護者の方との連携から、日常生活での表現活動について深く追う必要性について述べた。そして、児童が様々な環境で認めてほしい相手をつくり認めてもらう経験を増やせるよう、関わり方を考えていきたいという教師としての展望を記した。

2026年2月16日

岡山大学教育学部学校教育教員養成課程中学校教育コース地域教育専修

02B22271 富谷 志帆

主指導教員 清田 哲男 先生・上村 弘子 先生

## 学校教育での学習活動を通じた地域参画意識の変化に関する研究

### 論文の構成

#### 序章 研究の背景と概要

第1節 研究動機

第2節 (実践1) 新たな発見プロジェクト【巨大折り鶴編】

第3節 研究目的

第4節 社会的背景：OECD ラーニング・コンパス

第5章 エージェンシーを身につけるためにはどうしたら良いか

第6章 中学生が主体的に取り組むために必要なプロセス

第7章 地域の中で中高生主体の活動を実施することの意義

第8章 研究の構成

#### 第1章 問題の所在

第1節 問題意識

#### 第2章 調査の手順

第1節 本研究に関わる先行調査とその流れ

第2節 ロジャー・ハートの「参画の梯子」について

第3節 先行研究からのハートの「参画の梯子」の再整理

第4節 一度目の地域型ワークショップの実践方法の反省を踏まえた本研究での調査方法の検討

第5節 先行調査からのまとめ

第6節 先行研究から考えられる仮説2

第7節 先行研究から考えられる仮説3

第8節 調査対象

#### 第3章 調査結果

#### 第4章 調査結果の分析

#### 第5章 考察

第1節 考察①

第2節 考察②

第3節 考察③

## 第6章 今後の課題と展望

謝辞

参考文献

### 研究要旨

本研究では、高校生が学校での学習活動を通じて、地域に発信活動をする際の参画意識の変容とそのプロセスを明らかにすることが目的である。本研究に至った研究動機は、岡山県北地域プログラムでの教育実習やインターンシップを通じて、従来の地域連携活動が「地域の方や教員が子どもに教え、子どもが教わる」という一方向的な関係に陥りやすい点に課題意識を持ち、双方が学び合える関係の構築が重要であると考え、(実践1)「新たな発見プロジェクト【巨大折り鶴編】」を実施した。

(実践1)では、2024年6月22日・23日の2日間において(実践1)「新たな発見プロジェクト【巨大折り鶴編】」と題して岡山県北地域のA学校の高校生を主体として、10m×10m四方の巨大な折り紙をつくり、折り、2日目に高校生が地域の小中学生に教えながら折るというワークショップを行った。(実践1)では当日に活動の概要を説明し、大学生が全体を指揮しながらの活動であったため、ロジャー・ハートの先行研究では「十分に情報や理解する段階が与えられなかったこと」により、高校生達は「非参画」の状態にあったということが明らかとなった。

そこで、「主体である高校生が指示待ちの非参画の状態から、自分で考え行動しようとする参画の状態へと移り変わる契機や、参画の梯子を上昇するプロセス」を明らかにする必要があると考え、(実践1)の1年後、本調査となるA学校で実施方法を変えて(実践2)のワークショップを行った。本調査(実践2)では、学校教育での学習活動を違う角度から捉える題材を取り上げ、その題材について「高校生と共に学び、理解する段階」を経た。

その調査方法として、(実践1)・(実践2)を連続して参加した岡山県北地域A学校の高校生3名を調査対象者とし、活動の様子を質的に発言・行動を見ながらハートの「参画の梯子」に位置付け、点数付けし折れ線グラフとして表し、参画意識の変動を見取った。

本調査での結果として、(実践2)では高校生3名は(実践1)と比較して「参画の梯子」の上位段階へと上がる回数が増えた。

そして「参画の梯子」を上昇した契機とそのプロセスには、3つの考察が示唆された。1つ目には指示待ちの「非参画」の状態から「参画」へと上昇する契機として、「リーダーシップをとる大人・子どもの模倣や既に参画している子どもの考えに疑問を持つことなど、全員の存在が必要な状況設定が有効であること」が示唆された。

2つ目には、子ども達が自分たちで指揮をとり、主体的に取り掛かろうとする段階へと移った契機として、「子ども達だけで決める時間や状況が与えられ、意思決定の状況が連続したときに参画段階への移行がなされる傾向」が示された。

3つ目には、最高段階の「社会参画」の段階へ移行するには、地域住民からの興味関心を持った関わり方をすることや承認が不可欠であり、それによって高校生が地域の人を対して「もてなしたい」「活動を知ってほしい」という内発的な動機が芽生えることが明らかになった。

結論として、教員や大人が適切なサポートと意思決定の場を提供し続けることで、高校生の主体的な社会参画が促されるという可能性が示唆された。

序章では、本研究に至った経緯となる（実践1）を取り上げ、本研究の研究動機とその社会的背景を述べた。社会的背景にはOECDのラーニング・コンパスを取り上げ、地域の中で多様な人々と関わり合いながら成長することが必要とし、生徒エージェンシーや集団エージェンシーを育てることに繋がるという見方をしている。

第1章では本研究での筆者の問題意識を述べた。

第2章では、本調査となる（実践1）・（実践2）の調査方法を述べ、本研究としての指標となるロジャー・ハートの「参画の梯子」を取り上げ、東風（2025）の先行研究を踏まえて「参画の梯子」の再整理を行った。また、そこから考えられる仮説を立てた。

第3章では、（実践1）・（実践2）を連続して参加した岡山県北地域A学校の高校生3名（高校生A、高校生B、高校生C）の調査対象者の、それぞれの活動を事例として取り上げ、ハートの「参画の梯子」の8段階の指標に位置付けし、変動を折れ線グラフとして表した。

第4章では、高校生3名の「参画の梯子」の折れ線グラフの上昇、降下した場面を取り上げ、上昇した要因・降下した要因を考察し、述べた。

第5章では、高校生3名の「参画の梯子」の折れ線グラフを上昇した場面の分析結果から、参画の梯子を上昇した契機とそのプロセスを以下のように考察した。

**考察①）2、3段目「非参画」の状態から4段目「参画段階」へ移行する契機**

「参画段階」へ移行するためには、その状況を構成している全員の参画への主体性が有効である可能性が示唆された。

**考察②）「⑤子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる」参画段階から「⑥大人がしかけ、子どもたちと共に決定する」へ、さらに「⑦子どもたちが主体的に取り掛り、子どもが指揮する」参画段階へ移行する契機**

子どもたちだけで意思決定できる状況が与えられ、意思決定の状況が連続した時に参画段階への移行がなされる傾向が示された。

**考察③）③8段目「社会参画」の段階へ移行する契機**

大人が自分たちの活動に興味を持っていると実感することが8段目「社会参画」の移行する契機となることが示された。

令和7年度 岡山大学美術教育講座論文発表会

令和8年2月16日

岡山大学大学院教育学研究科教育科学専攻

22M24019 溝上怜海

主指導教員 清田哲男先生

副指導教員 赤木里香子先生

副指導教員 早川倫子先生

## 描画材料の自己決定の状況が表現活動に与える影響についての研究

### 論文の構成

#### 序章 研究の背景と論文の構成

##### 第1節 研究の目的と動機

##### 第2節 本論文の構成

#### 第1章 学習環境設定の制約と学習者との関係

##### 第1節 本章の目的と動機

##### 第2節 学びとは何か

##### 第3節 創造性を発揮するための自己決定

##### 第4節 美術教育における学習環境の自己決定や制約に関する先行研究

##### 第5節 本論での「自己決定」の定義と環境設定の課題

##### 第6節 本研究の仮説

#### 第2章 描画材料の制約が異なる表現活動状況の調査

##### 第1節 本省の目的

##### 第2節 調査方法

##### 第3節 分析方法

#### 第3章 調査の結果

##### 第1節 行為の分類の結果

##### 第2節 ワークシートの記述の分析結果

##### 第3節 言葉×行為によるグループ分け

##### 第4節 事例の分析, 考察

#### 第4章 考察

##### 第1節 言葉×行為の各グループの表現活動傾向

## 第2節 環境設定の提示の仕方と生徒の表現活動への当事者意識との関係

### 第5章 本研究の成果と今後の課題

#### 謝辞

#### 研究の要旨

本研究では、美術教育における学習環境設定について、教員が決定する場合と生徒が自己決定する場合とで、生徒の表現活動や学習状況にどのような違いが生じるのかを明らかにすることを目的としている。学習環境は教員が生徒の実態に合わせて検討する一方で、生徒が環境と自分の経験や内面とを相互作用させ、環境に合わせて自らを調整する力を身につけることも重要であるという立場から、制約の異なる学習環境と生徒が相互作用しながら表現する過程に着目した。そして、本研究では、実態に基づく検証を行うために、中学校美術科の授業で、教員が指定した描画材料を用いて表現する活動と、生徒が選択することによって自己決定した材料を用いて表現する活動とを設定し、それぞれの表現活動中の生徒の様子を観察する調査を行い、その結果について考察した。

第1章では、学習活動の中で制約があることや自己決定することが学習者にどのような影響を及ぼし、学習者と環境はどのような関係にあるのかを先行研究から検討した。その結果、学校教育において生徒による完全な自己決定を認めることは難しく、将来の自己決定のために、自己調整する力や、認められた範囲の中で自己選択する経験を通して、選択肢を増やす力を育てていく必要があるという考えに至った。そして、生徒の実態に合わせた学習環境設定を実現するための視座として、生徒の自己選択を認める程度の異なる環境設定の制約に着目する理由について論じた。

第2章では、第1章での仮説を基に、中学生を対象として、描画材料への生徒の関与の程度が異なる学習活動を行い、生徒の自己選択の程度による学習状況や表現活動の傾向を明らかにするための調査・分析方法について述べた。

第3章では、第2章の調査の分析結果を記した。振り返りワークシート記述文の分析による使用する言葉の傾向と、動画の分析による行為の傾向から、12グループに分類し、各グループから抽出した生徒の表現活動状況を個別に分析した。

第4章では、第3章の調査結果を基に、第1章で示した仮説を検証し、生徒が自己選択した描画材料を使って表現する活動と、指定された描画材料を使って表現する活動との、それぞれの活動や、経験する順序による、生徒の表現活動の傾向や学習状況の違いを明らかにした。そのことによって、これらの傾向を導き出した要因や、生徒の実態に合わせた学習環境設定の実現に向けた検討を可能にするための視点を考察した。

第5章では、本研究を通して得られた知見をまとめ、生徒の実態に合わせた学習環境の検討に必要な視点について述べた。本研究によって、描画表現活動における材料の制約の違いによる、以下の4つの傾向と、3つの考察を導き出した。

傾向1：教員に指定された描画材料で表現する活動では、表現の意図と工夫についての記述文に自動詞・形容動詞・形容詞が増加する。

傾向2：教員に指定された描画材料で表現する活動では、過去に評価された技法や、自分にできる技法・知識を使って、計画的に表現する活動になりやすい。

傾向3：生徒が自己選択した描画材料で表現する活動では、表現の意図と工夫についての記述文に他動詞が増加する。

傾向4：生徒が自己選択した描画材料で表現する活動では、材料を触ったり他者の表現を模倣したりしながら、表現方法を追究する活動になりやすい。

考察1：教員に指定された描画材料で表現する活動では、生徒は絵の具の色、水分量、筆、描き方を、生徒が自己選択した描画材料で表現する活動では、材料（素材、道具）を自己選択しており、どちらの活動も教員の指示から自己調整が起きている。

考察2：教員に指定された描画材料で表現する活動では、「材料を決めたのは教員であり、それを使用することへの自分の責任はない」という意識から、表現活動への当事者意識が弱くなる可能性がある。

考察3：生徒が自己選択した描画材料で表現する活動では、「自分の選択が認められている」という意識から、表現活動への当事者意識が高まる可能性がある。

本研究により、生徒の表現活動は、教員に材料を指定されるか、生徒が自己決定するかによって変わるのではなく、教員の指示から始まる活動であっても、生徒は指示内容を自分なりに解釈し、様々な自己選択をしているということが明らかになった。そして、教員による、生徒が選択できる環境設定の選択肢の示し方によって、生徒の表現活動への当事者意識が高められたり、下げられたりする可能性が示唆された。

教員の視点としては、生徒が何を自己選択しているのか、そして、選んだ理由を説明できるかに着目することが、表現活動への当事者意識や学習状況を見取る一助となる可能性がある。また、制作時の条件や、生徒による選択が認められていることを意識させる発問が、生徒が当事者意識をもって学習課題に取り組むための手立てとなる可能性がある。

今後の課題として、同じ材料を用いて、生徒による選択を認める指示と、制限的な指示による、生徒の感情や意識の変化を見取る追調査を検討し、考察の妥当性を検証する必要がある。

令和7年度 岡山大学美術教育講座論文発表会

D23601K 山中慶子  
主指導教員 清田哲男 教授  
副指導教員 赤木里香子 教授  
副指導教員 松尾大介 教授

学位論文題目：造形行為を伴う遊びを視座とした遊びと学習との質的な相関についての研究

## 論文の構成

### 序章 研究の背景と概要

- 0-1 研究の目的と動機
- 0-2 研究の構成と内容
- 0-3 本研究の方法とデザイン
- 0-4 調査における倫理的配慮

### 第1章 「造形行為を伴う遊び」からみた子どもの姿

- 1-1 本章の目的と研究の視座
- 1-2 幼児教育と小学校教育との接続の背景
- 1-3 幼児教育と小学校教育における学びの考え方
- 1-4 「遊び」と「学習」との関係についての仮説
- 1-5 幼児の「造形行為を伴う遊び」の観察調査結果
- 1-6 仮説の検証
- 1-7 第1章の成果と課題

### 第2章 幼児期の遊びの好みと教科学習への興味との関係

- 2-1 人の「興味」と「学習」との関係
- 2-2 「造形行為を伴う遊び」の好みの違い
- 2-3 調査方法
- 2-4 仮説
- 2-5 結果
- 2-6 考察
- 2-7 第2章の成果と課題

### 第3章 幼児の発達過程における環境との関わりの傾向

- 3-1 本章の目的
- 3-2 調査方法
- 3-3 調査結果
- 3-4 考察
- 3-5 第3章の成果と課題

### 第4章 幼児後期の他者模倣と学びとの関係

- 4-1 本章の目的
- 4-2 第1調査：幼児と材料との関係に保育者の行為が与える影響
- 4-3 第2調査：造形表現での模倣にみる幼児と環境との関係の変化

#### 4-4 第4章の成果と課題

### 第5章 幼児期の「遊び」と能動的な「教科学習」にみる構造の共通性

#### 5-1 本章の目的

#### 5-2 幼小の子どもを連続して見る視点

#### 5-3 調査方法

#### 5-4 結果

#### 5-5 幼児期と児童期との比較・検討（U児・M児）

#### 5-6 考察と仮説（第1章）の検証

#### 5-7 第5章の成果と課題

### 第6章 保育者と教師による子どもの学びの考え方

#### 6-1 本章の目的

#### 6-2 幼児教育と小学校教育が目指す子どもの姿

#### 6-3 調査方法

#### 6-4 結果

#### 6-5 考察

#### 6-6 第6章の成果と課題

### 第7章 総合考察

#### 7-1 本研究の知見の総括

#### 7-2 今後の幼小接続の検討に必要な視点

#### 7-3 今後の幼小接続を、「遊び」と「学習」との関係から考える

#### 7-4 推論：「遊び」は「学習」によって、いかに変化していくのか？

#### 7-5 本研究の意義

#### 7-6 今後の課題

## 研究の要旨

本研究は、幼児期の遊びの経験や興味関心が、小学校低学年期の学習へと接続するプロセスを調査・分析することで、幼小接続期の「遊び」と「学習」との質的な相関を明らかにするものである。そのため、12名の子どもの連続した幼小2年間の縦断的調査により、「遊び」と「学習」との活動の共通性について検討する。そのことで、今後の幼児教育と小学校教育との接続において必要な、保育者・教師による子どもの成長を捉える視点や姿勢について明確にすることができると考える。

近年の教育課題として、幼小の連携の強化が挙げられる。しかし、児童が小学校生活にうまく適応できない「小1プロブレム」に代表されるように、個々の連続した学びから派生する問題の究明には至っていない。その理由の一つに、子どもが主体的に遊びや学びに興味を持つとする姿が、幼児期と児童期とで保育者・教師によって切り離されて捉えられていることが挙げられる。そのため、幼小の子どもの姿を分断することなく精緻に観察・分析することによって、「遊び」と「学習」をつなぐための具体的な知見を得ることが喫緊の課題だと考えた。

本研究では、幼小接続のための視座として「造形行為を伴う遊び」に着目する。それは、「人—もの」との双方向的な関係へと目を向けるマテリアル・ターンの考え方を通して、幼小の子どもの連続性を見取ることにも拠るためである。幼児にとって、ものの特性を知り、自分の生活の中で素材を操作したりすることは、自己の世界を広げ、自己形成をしていくことを意味する。つまり、幼児期の「造形行為を伴う遊び」

による子どもへの追究は、図画工作科への接続だけでなく、マテリアルを介したすべての学習を包括する幼小接続の視座となる可能性があると考えられる。

第1章では、幼児教育と小学校教育の関係を歴史的な背景から調査するとともに、先行研究の整理から、幼小の子ども「遊び」と「学習」との質的な相関について、「幼児期に面白さを見出した環境との関わりは、類似した領域での学習に影響を与える」、「イメージを視覚化する『遊び』の過程で、目的を自主生成するような『学習』の素地が培われる」の2つの仮説を導きだした。

第2章では、子どもの「造形行為を伴う遊び」への興味と教科学習への興味とに関連があるのかを明らかにすることを目的とし、小学校低学年児対象の質問紙調査を実施した。その結果、①子どもの好む「造形行為を伴う遊び」の特性と、選好教科の学びの特質や学び方に相関性があることが示された。

第3章では、発達過程における環境との関わり方の傾向を明らかにすることを目的とし、牛乳パックピースを用いた実験的観察調査を行った。その結果、①幼児は成熟と経験を重ねるにつれ、社会的な意味をもった他者との相互行為を通して、遊びや表現行為を決定していることが示された。

第4章では、幼児期の模倣行為について二つの調査を行った。第一に、幼児が保育者を模倣する行為の観察調査から、模倣による学びについて考察を行った。その結果、①幼児と材料との出会いの場における保育者の行為は、その後の幼児と材料との関係に影響を与える、②価値ある目的に向かって自らの可能性を追求しようとするとき、幼児は他者を模倣することによって新たなことを学ぶことが示された。第二に、友達関係の変化に伴う模倣行為について、年長女児2名の遊びを1年間観察調査した。その結果、幼児の相互模倣の機能には、①自身のシエマの変容・発展、②他者との関係性の構築、③関係性の中で生まれた新たな価値を共同的に表現する機能があることが示された。

第5章では、観察の視点を定め、子どもの幼児期と児童期の姿とを比較分析した。その視点とは、「感受・触発の場面」、「『共有』、『模倣』にみる他者との関わり方」である。その結果、①感受・触発の場面は、幼児期と児童期とで類似した傾向がある、②他者との関わり方は、社会性の発達という側面から変化していくことが示された。

第6章では、保育者と教師の子どもの見取りの傾向を比較分析することで、視点の違いを明らかにし、両者が1人の子どもを見取る意義について検討した。その結果、①子どもを主体として発達を見取ろうとする保育者の意識と、全体の流れから子どもの学びを把握しようとする教師の見取りの違いが明らかになった。そして、②両者の見取りの違いによって、子どもたちの多様な発達が促される可能性が示された。

第7章で、本研究全体を通して得られた知見をまとめた。本研究の成果は、校種を超えた調査により、「遊び」と「学習」の質的な相関を具体的に示すことができたことにある。そして、①能動的な「学習」と「遊び」の起点は、個によって異なる「感受・触発」である、②「学習」と「遊び」の共通項は、目的を自主生成することにあることが明らかになった。これにより、今後の幼小接続を「遊び」と「学習」との関係から見るための三つの視点が得られた。

- a. 幼小の違いを肯定的に捉え、共通して子どもの感受・触発の素地を育む視点
- b. 「遊び」と「学習」の動機を重なりとして捉える視点
- c. 多様な価値（保育者と教師の見取りの違い）が子どもの成長を促すという視点

さらに、本研究の知見からは、幼児教育と同様、小学校教育におけるマテリアル・ターンの考え方に基づく物的環境の必要性が示された。